
放死者

赤ボールペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放死者

【Nコード】

N0026Y

【作者名】

赤ボールペン

【あらすじ】

死を放つ者と書いて、放死者。放死者の仕事は、人間に死を与えること。人間に対し、何の感情も持たず、黙々と与えられた仕事を続ける放死者。放死者と共に仕事をする死神。人間界と対の世界となる魔界からやってきた悪魔、悪魔と人間の間に生まれてしまった悪魔の子……。自分たちの今まで持っていた「当たり前」は、当然のように、奪われていく。

プロローグ

放死者^{ほうししや}とは、字の通り、死を放つ者のこと。

人間に隠れ、ひっそりと生きている。

そんな放死者は、周りに人を近づけてはならない。別れを惜しんではならない。

僕は常に、人間に対し、無感情で居続けなければならない。

この役職のこの才能が花開いてしまったのだから、仕方ないと言えは仕方がない。

人間に永遠の別れを作る、この仕事。

放死者。

誰からも好かれることの無い、悲しい奴。

その悲しい奴らの中の一人が僕なのであって、僕は、その悲しい奴らの中の一人なのである。

第1話「当たり前の恐怖」

目の前に、当たり前のように広がっている世界。当たり前のように存在する人間。当たり前のように立っている俺。

不思議に思ったことはないだろうか。

何故、自分がここに立っていて、人間という生き物が存在して、その人間がいる世界が当たり前のように広がっているのか。

俺は柄にもなく、そういう小難しいことを考えてみる。

“当たり前”ということを通して……。

冒頭から一体何を書いているんだか。

自分で自分に呆れながら、当たり前のように右手で鞆を持ち上げる。

「そういえば俺、左手では鞆持たないな」
どうでもいいか。

「行ってきたーす」

独り言のように玄関で呟き、家を出た。

「真^{しん}」

家から少し出たところで、幼馴染に声をかけられた。

佐藤悠斗^{さとうゆうと}。

彼は、同級生の男の子である。だが、本当に男子かと疑ってしま
うくらい、彼は美少女顔である。

成績優秀、スポーツ万能の上、性格良好という完璧超人なので、
男女共にこいつの支持率が高い。まったく、羨ましい奴だ。

「桜だね」

「あん？」

「ほら、桜だよ。そこにあるでしょ？」

悠斗が、一本の桜の木を指差す。

声変わりしたといっても、男子の中では高いほうで、見事なアルトボイスである。

「ああ、ホントだ。桜だな」
そう言うのと、

「綺麗だね」
と笑った。

俺は正直、こいつのこの笑顔に弱い……と思う。

高校一年生から高校二年生へと無事進級。

クラス替えは成績純だから、あまりメンバーは変わらない。

俺もこいつも進級試験で同じくらいの点数だったから、今年も多分同じクラスだろう。あ、一夜漬けということは内緒で。

「見て見て真！ また一緒のクラスだよ！」

悠斗は、俺の隣で騒いでいる。何を分かりきったことを言ってるんだ。とは思いながらも、

「よかったな、一緒のクラスで」

「うん！」

この笑顔を見せられたら、そんな言葉返せるわけあるまい。

ニコニコと満面の笑みで足取りの軽い悠斗が、今にもスキップしそうな感じで俺の前を歩いていく。

「真！ 早く早く！」

振り返って笑う。

「ねえ！」

「はいはい」

しょうがないなと心の中で呟きながら、俺は走った。

当たり前の会話、当たり前のように広がっている世界、当たり前のように俺を呼ぶ幼馴染のところへと駆ける俺、当たり前に散る桜、当たり前に立つ校舎、当たり前の……。

当たり前の、日常。その反対は、非日常。誰も、非日常は望まない。

当たり前前に包まれた日常。当たり前前の日常を当たり前前のように繰り返す当たり前前の日常。当たり前前と日常は関連していて、それも当たり前前で、その事実も当たり前前で、日常で、もしかしたら、非日常も日常で当たり前前なのかもしれない。

人間はもう、「日常」という世界の中に、当たり前前のように溶け込んでしまっている。

だからその「日常」をパッと、誰かに奪われたとき、人間は動揺し、自分を忘れてしまうだろう。

俺が今日の前にしている当たり前前の光景は、実は一番、怖いものなのかもしれない。

桜は散る。

俺の前を、後ろを、周りをはらはらと、舞っては散っていった。

俺はそれを、ただ眺めていた。

第2話「転校生がやってきた」

「オラ、席に着けお前ら。HR始めるぞ」

「ウーッス」

新学期が始まり、約一週間。

担任は若い女の先生を望んでいたが、生憎の男。だが、これはこれで楽しい人だから、別に嫌いではない。

「今日は転校生紹介する」

と言った瞬間、辺りはすごい勢いでザワザワと雑談を始めた。

「静かにしろ。ホントにお前らは転校生好きだなあ」

担任はニシシと笑う。

俺は別に、転校生に興味は無いけど……。

「ねえ真、転校生ってどんな子なんだろうね、ね」

悠斗は転校生に興味津々のようだ。

たまたま後ろの席で、机に這い蹲^{つくば}るような感じで話しかけてきている。

「おい、入って来い」

先生が手招きをすると、一人の男子生徒が入ってきた。

周りが更に騒がしくなる。俺も、ソイツを見て少なからず、驚いた。だってソイツは、

「間宮^{まみや}シドウくんだ」

恐ろしいほど無表情で、その表情が見えないほど深く、フードを被っていた。おそらく私服だろう。

この学校は私服登校オッケーだ。一応制服は指定されているが、入学から一年経った今では、クラスメイトの三分の二ほどが制服に私服を組み合わせたといったスタイルである。俺は、百パーセント制服だけだ。

俺が驚いたのは服装ではなく、ソイツの左手が包帯で巻かれていたことだ。

何かを殴ったのか、傷があるのか、ファッションなのか、俺の頭の中で次々と包帯で巻かれてある理由が出てくる。そして、消えていく。

新学期が始まってまだ一週間なのに、前の学校から転校か……。しんどいな。

「それじゃあ間宮くん、みんなに一言」

「……」

そいつは、黙って頷いた。うなず

「え、あ……間宮？」

「……」

声をかける担任の目を、ソイツは見続ける。担任のほうが背が高いものだから、見上げる形だ。

「……え、あ、はい……よく、できました」

しばらく担任は奴と見詰め合っていたが、とうとう担任が負けてしまった。

「じゃあ間宮くん、君の席は後ろの空いている席だ。分かるだろう？」

担任は焦り口調で、にこやかな営業スマイルを振りまいた。

奴は何も言わず、後ろまで歩き、腰を下ろした。

「それじゃ、これでHR終わるぞ」

担任は、足早に教室を出て行ってしまった。

「ねえ真」

「ん？」

悠斗が後ろから話しかけてきている。俺はその声に反応して振り向く。

「変わった転校生だね」

「そうだな」

先ほどまではしゃいでいたのが嘘のように、悠斗の声は落ち着いてしまっている。テンション下がったか。

「アレ、なんだろうね」

悠斗が、そつとアイツの席を見る。

アレとは言うまでもない、奴の左手の包帯である。

「怪我かな？」

「さあ。フアッションなんじゃね？」

「そういうフアッションある？」

「俺は知らないけど、一部地域で流行ってるのかさ」

「そうなのかなあ」

「そういうことにしとけよ」

「うーん……分かった」

悠斗はあつさりと俺の仮説を飲んでしまった。

俺だってアイツの左手は気になるけど、初対面で左手のことを聞くわけにはいかないし。

それに、今あいつの周りにはもう女子の集りができている。流石にあの輪の中を割って入ろうなんていう自殺行為はしようとは思わない。

他の男子も、女子の圧に負けてしまって、転校生に興味はあるものの、近づけないでいる。

「ねえ真、あの間宮くんって、どんな顔してるのかな？」

「さあな」

俺らの角度からでは、アイツの顔は見えなかった。

「もー真、今日超曖昧だよ。転校生のほうばかり見て。気になってるの？」

「ん……まあ、それなりに」

「珍しいね。真が転校生に興味持つなんて」

「別に。どの転校生にも興味がないわけじゃないけど」
近づくのが、面倒なだけで。

「ふうん」

そこで、会話は途切れた。

外で咲いている桜は、今日も綺麗だった。もう大分散ってしまったけれど、まだ蕾のものもある。

俺は、散ってしまった桜の花びらにはさらさら興味はない。

俺は、咲いている、花開いている桜の花びらを見て、美しいと、
感じたのだ。

第3話「黙り続ける」

「……」

ああ、イライラする。

なぜ、どこの学校に行っても先生に自己紹介を求められるのか。先生が僕の名前を紹介してしまえば、僕は何も言うことがない。

好きな食べ物でも言えっか。

僕が自己紹介をしてどうする？ 好きな食べ物を言ったところで、一体何があるというんだろう。誰が得するっていうんだよ。ただでさえ朝嫌いなのに、マジテンション下がる……。

僕も生前は、こんなだったのだろうか。

考えるとゾツとしてくる。嫌だなあ。僕がこんなにクドい生き物だったならば。

「ね、ねえ」

「……？」

一人の女子に話しかけられる。

どうやら僕は、知らない間に沢山の女子に囲まれていたようだ。

「間宮くんどこから来たの？」

「……」

どこから……。

いきなり難しい質問だなあと思いながら、僕はことごとく無視をする。

それに飽きて他に言ってくればいいのに、女子は今もなお、僕に質問を続ける。

僕は何も答えない。

答えてやったほうが親切なのかもしれないが、僕は人間に対し、親切にするつもりはない。

質問の中には、立场上答えられないものもある。

答えられるものと答えられないものがあつたとき、人間は答えら

れないものに対し、凄く興味を示す。話したくなくても、いずれかは話さなければならなくなる。

ならば、何も話さなければいい。

僕という奴がどんな奴なのか、何月何日生まれで、出身地がどこで、今まで何をやってきたか、全てを秘密にしておけばいい。

そのうち相手が「コイツはこういう奴だ」と思っ去つてくれれば、僕としては好都合だ。

人間観察は、人間と少々離れた場所で行うのがいいからな。

僕はスツと席を立つ。

「え、とっと、間宮くん？」

歩いていく僕に声をかける人。

「どこ行くの？」

「……………便所」

僕はまた、歩き出す。

クラス内で初めて発した単語が「便所」というのが気に触るが、まあいっか。

「便所」という単語は便利だ。どの状況からでも僕を逃がしてくれる。

人ごみからも、授業からも、掃除からも逃げられる。ただ、仕事だけは僕を追いかけてくるけど……。

仕事だけは、逃げる僕を逃がさぬように、僕をずっと、追い続ける。仕事は生き物じゃないのにな。笑えてくるよ。

僕は、少し口角を上げてみる。腹の中からクツクツと笑いがこみ上げてくる。そして、笑みがこぼれ出してしまう前に、僕は口角を元に戻す。

無表情、無感情。

これが、僕が仕事をする上で僕が心に決めていることだ。

僕の仕事は、人間に死を与えること。言葉を変えれば、人間を殺すこと。

そして僕は、人間ではない。

上司^{うえ}から言われるとおりにただただ人間を殺していくだけの物体。ただの、人間の形をした物体なのである。

だから僕は、物らしく無表情、無感情でいなければならない。人間の前では。

時計の針がカチ、という音を立てながら動くのが分かる。もうそろそろ、教室に戻らなきゃな。

僕は、クルリと方向転換をして、今歩いてきた廊下に戻った。

最初くらいは、真面目に授業を受けておいたほうがいいだろう。

人間は怒りっぽいからな。初日から起こられるのは気が引ける。

「相変わらず、窮屈だな、人間界は……」

僕は呟き、教室に足を踏み入れた。

第4話「同業者」

休み時間になり、僕は再び、教室を出る。

みんなは楽しくランチタイムであり、僕もまた、昼食をとることにする。

校内に自動販売機があるというのは確認済みだ。僕は、中庭に設置された自販機へと向かう。

自販機の商品は、コーヒーを始め、コ○・コーラやイチゴミルクなどのジュースがある。一品90円という学生の財布に優しいものだ。その代わり、サイズが小さいみたいだけど。

僕は迷わず牛乳(170ml)を購入した。パッケージには「おいしい牛乳」と書いてある。牛乳なんておいしくなくてもそうでなくとも、腐ってないくらいいいんだけど。

会社の事務所からくすねてきた菓子パンと、先ほど購入したおいしい牛乳(170ml)を手に、僕は一人になれる場所を探して歩いていた。そのとき、

「おい、シドウ」

上から声がかかる。

「屋上誰もいないからさ、上がってこいよ」

独特なイントネーションで早口で、ソイツは言った。

おう、と軽く返事をして、僕は右足で地面を蹴る。

「え？」

教室や廊下がざわめいた気がした。動体視力のいい奴なんかは、僕の顔が見えていたのかもしれない。

僕は、地面に足を着く。

「おいおいシドウ、初日からそんなことやっちゃっていいのか？」

1階から5階の屋上まで飛んでくるなんて」

目の前にいるソイツは言う。

「かまわないよ。それに、いちいち階段なんか上ってたら面倒だ。

疲れるし」

僕は屋上の床の砂埃を足で払いのけ、座った。奴は、屋上のフェンスに腰掛けている。よくあんなところに座れるもんだ。

「疲れるって、お前まだ17だろ？」

「設定上な。もう何年17歳やってると思ってるんだ」

「……さあ？」

ああ、殴りてえ。この猫顔、ぶん殴りてえ。

「まあ、俺らは年取らないしねえ。ずーっと死んでしまった年齢で止まってるよね」

「老けて死ね」

「ええ？ シドウひどーい。てかもう死んでるし。死んだって言うてるし」

ソイツはサラッと言う。

そうだ。僕たちはもう死んでいる。だから他人に「死ね」など言われても、何とも思わない。死の恐怖など、僕やコイツにはない。持つ必要も無い。僕たちはもう、死の恐怖を味わったのだから。

僕は放死者で、

「シドウ？」

コイツは、人間の肉体と魂を別離させる存在。

——死神。

仮にも神で、こんな奴が神で、こんな奴でも神なのだ。こいつを神と呼んで崇め讃えていいのだろうか……。

「なんでもない」

僕は菓子パンの袋を開ける。

「どうだ？ 人間界は」

死神は僕に話しかける。

「相変わらず、窮屈だよ」

僕の、率直な感想だ。

「なんだ、いつもソレじゃないか」

「他にどんな感想があるって言うんだよ」

「担任が女だとか、クラスに可愛い女子がいるとか、先輩に胸キュンとか……」

「死ね女たらし。てか担任男だし」

「グハッ」

死神は胸を突かれたような表情でフェンスの上で器用にのた打ち回った。そしてその動きをピタリと止め、

「なあなあ、気になることはないのか？」

ガラリと雰囲気を変えてきた。

「ないよ」

「ないことはないだろ」

何かあっただろうか。

「あ……」

「どうした？」

気にかかることが一つ、あった。

「この学校、やたらと悪魔がいるぜ」

「悪魔が？」

死神は顔をしかめる。無理もない。悪魔は僕たちの敵だからな。

「そりゃ、悪魔くらいいるだろ」

「そうじゃなくて、数が多いんだよ。お前も分かるだろ」

今だって、悪魔がうようよ浮いている。

「まあ、ほとんどが雑魚だから、心配はしてないけど」

「そっか」

雑魚悪魔なら、僕らでも握り潰せば殺すことができる。雑魚ほど弱いものはない。

「それじゃ、僕は行くから」

空になった菓子パンの袋の中に、潰してしまった牛乳パックを入れ、僕は立った。

「あまり人間に近づくなよ、リュウ」

「お前も、あんま派手なことすんなよー」

死神の言葉は軽い。

リュウ。

死神の名前。会社から与えられた、たった一つの名。

僕は、リュウの本当の名前を知らない。僕のことさえも、僕は知らないのだ。

もう授業が始まる。

僕は、周りに浮く雑魚悪魔を握り潰す。

手を開くと、もうそこに悪魔はいなかった。

「……」

そのことにちょっとした快感を覚え、自分が放死者であることを、改めて覚えなおすのであった。

第5話「冷めた奴」

俺は、転校生に興味はない。というより、『転校生』という言葉に興味がない。

転校してこようがこまいが、俺が興味を持つのは、人間そのものである。

おもしろそうだと思えば興味を持つし、つまらないと思えば興味は持たない。ただそれだけの話だ。全ての転校生に『転校生』というだけで興味を持つ必要など無いのだ。

そんな俺を見て、他人^{ひと}は「冷めた奴」だと言う。

俺は、自分のことを「冷めた奴」だとは思わない。

現に今、一人の転校生に興味を持っているからである。少しばかり、普段より体が熱い。

間宮シドウ。

初日から私服で登校してきた変わった奴。必要最低なことしか喋らないし、必要なことも、喋らないときがある。最初は興味を示していたクラスメイトも、今ではもう沈黙しか返ってこない質問タイムは終わりにしたらしい。

俺はアイツが楽しそうに笑っているところを見たことがない。怒るところも、悲しむところも、他人をバカにするところも、何一つ、アイツの表情が変わるところを見たことがない。

「おい兼倉^{かねくら}」

今はずっと机に伏せて眠っている。

「兼倉ー」

朝からずっとだ。よく眠れるよな。

「兼倉!!」

「はい!!」

立てと言われたわけでもないのに、俺は勢いよく立ち上がった。「ボォーっとしてんじゃねえよ」

「あ、すみません」

クラスみんながクスクスと笑う。それに便乗するかのように、木の葉がカサカサと音を立てた。なんか、全てのものに笑われた気分だ。気分悪。

俺は座り、再び視線を間宮に向けた。

なんだよ、笑ってもないし。起きる気配も感じられない。

「間宮あ」

先生が声をかける。

「……」

間宮が機嫌悪そうに、伏せていた頭を起こした。

「間宮、起きてたか？」

「……それなりに」

「じゃあ続きから読んでみる」

「はあ……」

間宮はいかにもダルそうに、立ち上がった。そして、

「しばらくして、その人はやっと……」

一通りそのページを読み終わり、これでいいですかと聞いているかのように、先生の顔を見る。

「お、おう、座れ。今度からは頭上げておけよ」

先生は、そう言うの間宮に背を向けて、教卓のほうへと戻っていた。

間宮は、先生に注意されたにもかかわらず、すぐに頭を伏せてしまった。なんという神経の持ち主だ。

まったく、不思議な奴だ。

起きているはずがなかったのに、爆睡だったはずなのに、読んでしまうのだから。俺には、あいつがただ頭を伏せているようには見えなかった。

俺は、アイツに興味を持った。興味津々だ。

まだアイツのことを、俺は一切知らない。どこ中出身で、どこ高

からの転校生で、誕生日がいつで、血液型、身長、体重、性格も知らない。

もっと知りたい。アイツのこと。アイツの左手のことも知りたい。ヤバイ。胸が高鳴る。体が熱い。人間に対して、こんなに興味を示したのは、いつ以来だろう。もしかすると、初めてかもしれない。そういうところを見ると、俺は今まで「冷めた奴」だったのかもしれない。でも、今は違う。間宮シドウという人物について詳しく知りたい。そういう思いが、俺の中を駆け巡っている。

高鳴る胸を押さえつつ、俺は終業のチャイムと同時に、奴との接触を図った。

もう俺は、俺を抑えることができない。

風が、教室内を走った。まるで、俺に落ち着けと言うように。

第6話「感じた寒気」

俺は奴に興味津々だ。

いや、興味という領域を超えて、興奮に達していると思う。

アイツのことを知りたい。アイツの左手に、幽かに感じる妖気。アイツの左手に隠されたものを、知りたい。

興奮の領域を超え、もう欲望の域だな、これは。

そうは思っていない、こんな俺にブレーキはもうかけられない。

「な、なあ」

「……」

話しかけると、間宮はダルそうではあるものの、頭を起こしてくれた。そのとき俺は、初めて間宮の顔をじっくりと見た。

目にかかりそうなほど伸びたオレンジがかった前髪、ほんの少しだけ垂れて見える目、一の字に引っ張った薄い唇……。結構、整った顔立ちをしている。

「少し、話そうぜ」

「……」

間宮は、何も言わず、俺の顔を見てきた。話せ、ということだろうか。

「お前、誕生日は？」

まずは、無難なところから聞いていこう。

「……」

「おい」

「……」

「聞いてんのか？ お前」

「……」

いくら話しかけても、返ってくるのは沈黙ばかりだ。聞かれちゃ、まずいことだったのかな。そう思い、話題を変えてみる。

「じゃあお前、血液型は？」

「……」

しかし、返ってきたのはやはり沈黙。

なんか、他のやつらがコイツと会話することを断念していった理由がなんとなく分かる気がする。会話が全て、一方通行だ。会話にもなっていない。

「なんか喋れよ、お前」

「間宮シドウ」

「は？」

なんだよ、今更自己紹介か？ お前の名前なら、転校初日に担任から聞いた。

「僕にも名前がある」

ボソリと、彼は言った。

「なんだ、名前呼んで欲しいのか？」

「僕の名前は、お前じゃないからな」

間宮は、吐き捨てるように言った。

「それと」

「なんだよ」

「僕は、僕のことについては話さない。一言もだ」

「え、なんで」

「いづれ分かるよ。君はね」

そう言った瞬間、間宮シドウが笑った気がした。ニヤリ、と。俺の背筋がピリ、と冷えた気がした。

間宮シドウは立ち上がる。

「お、おい、どこ行くんだよ」

「便所」

「もう授業始まるぞ」

「分かってる」

間宮シドウは、教室から出て行った。

『いづれ分かるよ。君はね』

そう残された奴の言葉が、俺の頭の中でグルグルと回る。
風が吹いた。

俺の興奮は、一気に冷めてしまった。

俺が感じた冷たさは、彼の放った言葉だったのか、彼の不気味な
笑みだったのか、突然吹いてきた風のせいなのか、俺には分からな
かった。彼の言葉の意味すらも、俺は分かっていなかった。

「真」

「え？」

振り返ると、見慣れた顔がそこにあった。

間宮シドウは教室に帰ってきていたみたいだが、俺はもう一度話
しかけようという気にはなれなかった。

「ねえ真、授業、始まっちゃうよ」

「あ……うん」

俺はまだ、戸惑いの色を隠せずにいた。

そのせいでまた授業に集中できず、先生に怒られたということは、
言うまでもない。

第7話「自宅にて」

「はぁ……」

大きく長い溜息をひとつ。

「どうした？ シドウ」

いきなり話しかけられたことに驚いて、体が跳ねた。

「なんだ、リュウか」

「なんだってなんだよ、なんだって」

リュウがドカッと僕の横に座る。

僕とリュウは、同じ家に住んでいる。内装はとてもスッキリしていて、机とソファーとテレビとたんすくらいしか家具は置いていない。どうせ、一年そこらで出て行ってしまう家だから、これでもいい。ちなみにこの家は、僕とリュウの所属するD・C・O・(Death Control Organization)という組織から与えられたものである。

「シドー？」

リュウは、返事をしない僕の顔を覗き込む。

「どうしたんだよー」

「別に」

「なんだよ、冷たいなあ」

リュウは少々早口だ。猫顔で、殴りたくなる顔。髪が長いからといって一つに束ねている。髪のボリュームは少ないので、チョロンと八センチくらいの尻尾が垂れている感じ。髪が長いのが嫌なら、切るか縮めるかすればいいのに、どうやらあの髪型がお気に入りのように。

「ねえシドー」

「なんだよ」

「家の中ではこれ脱がない？」

リュウが俺が羽織っているコートをツンツン引っ張ってくる。

「脱がない」

「暑苦しいなあ」

プーッと口を尖らせるリュウ。

「あとさあとさ」

「なんだよ」

「フードも取ろうよ、えいつ」

「あっ」

今まで被っていたフードをのけられてしまった。

僕が着ているコートはフードが付いた人間界ではあまり見かけないデザインだ。このコートもD・C・Oからの支給品である。フードが付いているのは、顔を見られたくないでしょ？ とのこと。放死者と死神で色分けされているようで、僕は黒、リュウは灰色だ。

「眩しい……」

目を細めると、

「いっつもフード被ってるからだよ。日の光に当たりなさい」

「やだよ」

僕は、再びフードを被った。

リュウは死神の癖に日の光が大好きだ。よく日向ぼっこしてるし、コートについているフードもあまり被らない。

「ねえシドー」

「んだよ、さっきから」

だんだんうつとうしくなってきた、つい言葉が荒くなる。

「学校どう？」

「あん？」

「だから、ガッコ」

僕が苛立っていることもお構いなしに、リュウは学校の話題を持つてくる。

「どうもしねえよ。窮屈なだけだ」

「またそれだけえ？」

「それ以上何を話せって言うんだよ」

かねくらしん

「兼倉真」

「……」

兼倉真。

その名前を聞いたとき、僕は体を振るわせた。

「今日、お話してたでしょ？」

「なんで知ってるんだよ」

「んー、見てたから」

「そうか」

「で、どうだったの？」

どうだった、か。

正直、パツとしない。少量の妖気を感じ取っただけだ。ただの、人間。

「ただの人間に興味はない」

「そっか」

リュウは一息ついて、

「ホントに、ただの人間なのかな？ 兼倉くんは」

と言いつ出した。

「ただの人間だよ、あいつは。多少霊力持ってるって感じのさ」

「そっか」

僕が断言すると、リュウはそれ以上深入りしてこなかった。

兼倉真は、リュウだけでなく、僕も気にしていた奴の一人だった。なんとなく、人間より微妙に強い妖気を感じたから。

でも、そういう奴は人間界にもいるものだ。

僕は、兼倉もそういう類の奴だと思った。

『いずれ分かるよ。君はね』

あれは、成り行きで出てしまった言葉だった。きっと僕は、ああ言っておきながらも兼倉には話をしないだろう。自分の存在を、人間に知られてしまっただけは困るから。僕が存在することも、リュウが存在することも、D・C・O.が存在することも、人間界が全てこ

れらによって支配されていることも全て。
人間は、知ってちゃいけないんだ。その事実を。

第8話「家路」

家路に着くと、もう辺りは暗くなり始めていた。

部活には所属していないのだが、クラスで遊びすぎてしまった。こんなにも帰りが遅くなるなど、考えてもいなかった。

もともと、悠斗が図書室に行きたい、とか言うからこんなことになったんだ。悠斗が図書室からなかなか帰ってこないから、遊んでしまったのは俺だけだ。

「僕だけのせいじゃないからね、真」

「え？ あ、ああ、うん」

俺の考えていたことに相槌を打たれたので、驚いた。もしかしてこいつは、超能力とか使えるのだろうか……。

バカなことを考えるのはやめよう。だって俺、高校生だし。ガキじゃないし。形だけでも大人っぽくなっておきたい。

「それにしても真、間宮くんにとっても興味あるんだね。珍しい」

「珍しいか？」

「珍しいよ。だって、いつも自分から転校生とかには話しかけないじゃん」

「俺さ、転校生っていう響きには興味ないの。面白そうって思ったから近づいただけで」

「何度も言う。俺は、転校生には興味がない。興味があるのは、人そのものだ。」

「面白そうって、何が？」

「だってアイツ、授業中絶対寝てたのに、当てられたらちゃんと教科書読むんだぜ？ 今日の小テストも満点だったし」

面白い、というより、不思議に思ったのだ。

「でも、なんか冷めた」

「え、何で？」

あの言葉。「いずれ分かるよ。君はね」という、あの言葉のせい

だ。高ぶった熱は、その言葉から放たれた意味の分からない恐怖によって、冷めてしまった。

と、悠斗には言えないので、

「だってさ、アイツ喋らないし」

「……」

俺の率直な感想に悠斗はクスリと笑い、

「そうだね」

と言った。

「あ、じゃあ僕はここで」

十字路で悠斗は右を指差した。俺はこのまままっすぐ向かう。

「おう、またな」

「うん」

悠斗の小さな背中が遠ざかっていくのを見て、俺は再び家路についた。

見慣れた住宅街を、俺は何も思わずに歩く。歩き慣れた道を、慣れた足取りで歩く。そして、見慣れた一軒が目に入る。俺の家だ。

「ただいま」

誰もいるはずがないのに、俺は毎日玄関で「ただいま」と言う。習慣とは恐ろしいもので、やめようとは思っていても、なぜか言うてしまうのだ。

「ふう」

家に着いたという安心感から、息が漏れる。

荷物を自分の部屋に置こうと、階段を上ろうとした瞬間、

「おう、帰ったか」

「……は？」

この家には、俺しかない、はず。なんだけど、なんだか野太い声をする。

息を吞んで、後ろを振り返ると、そこにいたのは、

「なんだよ真。しばらくいなかったからって、俺のこと忘れたのか？ この野郎」

俺の引きつった顔を見てニヤニヤと笑う、俺の保護者だった。

第9話「オッサン」

「てか、何でいるんだよ」

麦茶が入ったコップをテーブルの上に置き、俺は保護者に問う。

「何でって、ここは俺の家だぞ？」

はかますがた

目の前に、足を組み、袴姿で煙草をふかしているオッサンは言う。
このオッサンは、年から年中袴姿だ。今この時代になってこの服装をこよなく愛すってどうなんだろう。

「確かにここはオッサンの家だけど、いつもは会社で生きてんじやん」

「オッサン言うな。14しか離れてないだろうが」

「14も離れてりゃ十分だよ」

俺の思うオッサンと若者の境界線は、30だ。

「何で帰ってきたの？」

俺は、オッサンの吐く煙草の煙を手で払いのける。

「休みができたんだよ」

「珍しい。流石の悪魔も春眠暁を覚えずってか」

「お前、意味分かって言ってるのか？」

グサツ。

おや、何かが胸に突き刺さった気が。

「わ、分かってるに決まってるじゃん。俺、これでも学生だぜ？」

ははは、とその場を適当に流す。テスト前だけに勉強するのはやっぱダメか。

オッサンのジト目が気になるところだが、話題を変えよう。

「それで、仕事のほうは落ち着いたんだ。でも父さんは？」

「ああ、親父はまだ社にいるよ。今日は番だしな。俺はたまたま非番だったから帰ってきただけ」

「なんだ、オッサンだけかよ」

父さんに少し、話したいことあったのに。

「なんだ、俺だけじゃ不満か？」

「別に」

重たい腰を上げ、席を立つ。

「やけに冷たいな……反抗期ってやつか？」

……違うと思う。

「どうだ？ ガッコは」

「は？」

せっかくドアの前まで来たのに、話しかけられた。

「だから、学校だよ。学校」

「あ、ああ、別に、変わりなく」

言いながら、ドアノブに手をかける。もうそろそろ、この人との会話も疲れてきた。

「悪魔に変わりは、ないか？」

「……」

その言葉に反応して、せっかくドアノブにかけた手を、引っ込めてしまった。

「見えてるんだろ、まだ。しかも、見える種類も増えてる」

「……」

体が、少し震えている。

「当たり前だろ」

オッサンが、煙草の火を消した。

オッサンの顔は、いつもとは違う、真面目な表情だった。

どう答えたらいいか分からず、床を見つめていると、

「今お前に見えてるのは下流階級悪魔（下流階級悪魔）だけだと思うが、油断は禁物だぞ」

「……分かってる」

「お前の身体（からだ）は、常に狙われてるんだからな」

「分かってるよ……」

だからと言って、何ができる。俺に、何ができるって言うんだ。

「お前の周りをうろついている雑魚を一匹ずつ祓ってたら、キリがな

いからな。できる限りのことはしてやるが……」

「うん、分かってるよ」

人間が、どうにかできる問題じゃないって。いくらオッサンが祓魔師でも、この問題はどうにもできない。俺から悪魔を引っぺがすなんて、誰にもできやしない。

だって俺は、

「どうしようもないのは分かってる。俺が……」

俺は……

「俺が、この人間界せかいに存在する限り……」

「真……」

「悪魔がここにいる限り」

俺は………悪魔だから。

上流階級悪魔と人間の間生まれた、悪魔の血が流れる子。

祓魔師のお偉いさんに言わせてみれば、「汚れた血」「汚れた存在」。

人間界で、生きていてはならない生物……。

俺は、ドアを開け、リビングを出た。外では雨が、降っていた。

第10話「仕事の時間」

「おい、シドウ」

「ん？」

リュウに肩を叩かれて、集中が途切れる。

「仕事だ」

リュウは、珍しく家の中でフードを装着していた。

「もう、そんな時間か」

携帯で現在の時刻を確認する。夜の十二時を回ったところだ。

「そんなに集中して、何やってたんだ？ シドー」

先程まですぐ真面目な顔していたのに、喋ったらすぐ崩れる顔。もったいないな。

「宿題だよ」

「学校の？」

「そ。学生さんは忙しいんだよ」

山ほどの宿題出しやがって、あの先公。

「宿題ね。面倒くさいやつだったね、あれは」

「やったことあるのか？」

「ま、一応その年は生きてましたし」

「へえ」

なんという会話をしているのだろう。

というか、リュウって何歳だろう。何歳まで生きていたのだろう。そこら辺、僕はリュウに詳しくないと思う。

「それで、今日の仕事は？」

「ああ、これリストね」

「ん」

リュウが携帯を投げつけてくる。（ちなみに、リュウの携帯はスライド式。）

「平塚清汰36歳病死、長原光弘22歳事故死、島田キヌ89歳病

死……」

僕はリュウの携帯のディスプレイを見ながら、書かれてあることを読み上げる。

「今日は6人か」

「後は他の番隊に振り分けられたみたいだよ」

「そっか」

毎日毎日、仕事内容は違う。何人以上というノルマはない。ただ、与えられた仕事を黙々とこなすだけだ。

仕事は普通、チームで行う。その理由は、力のなさだ。やはり、人の命を奪っていくわけだから、それなりの力が必要となる。一人で行うには限界があるのだ。だからD・C・Oは番隊の制度を取っている。

番隊の制度とは、放死者一人と死神一人でペアになり、そのペアが三つ四つ集まって一つの団体となることだ。僕たちはこの団体のことを番隊と呼ぶ。

番隊がいくつあるのかは僕は知らない。D・C・Oに関する情報をD・C・Oから直接放死者に公開することはない。死神を通して放死者に情報は回ってくる。

いくら同じ組織に入っているとはいえ、放死者より死神のほうがくらは上だ。どんなに死神が放死者より頼りなくても、バカでも神は神なのである。上司は、そう決めているらしい。

「じゃ、行くぞ」

「はいはい」

僕とリュウは、グループにはならず、二人だけで行動する。僕がD・C・Oに連れていかれたときにはもう、そのように決まっていた。

番隊としては十三番隊に振り分けられているものの、集会等にも全く顔を出さないため、その存在はあまり知られてはいない。

「どこから行く？ シドウ」

「病院から」

「了解」

僕たちは、コートに身を包み、暗闇の中へ姿をくらしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0026y/>

放死者

2011年12月2日22時53分発行